

幾何学の精神と繊細の精神
—パスカルの「理性」の構造—

児玉 正幸*

The Mathematical Mind and The Intuitive Mind
— Pascal's Structure of Reason —

Masayuki KODAMA*

Abstract

According to Pascal, we have three kinds of powers of recognition, viz: SENSES (SENS), REASON (RAISON), HEART (CŒUR)

REASON has two functions. One is typified by geometry. Pascal, who was very good at mathematics, named this sort of REASON “The Mathematical Mind” (esprit de géométrie).

The other function can be observed in daily life. Pascal named that sort of REASON “The Intuitive Mind” (esprit de finesse). He made a very clear distinction between these two kinds of REASON.

In this paper I clarify Pascal's Structure of Reason, consisting of “the Mathematical Mind” and “the Intuitive Mind”.

KEY WORDS: *Pascal, Mathematical Mind, Intuitive Mind*

はじめに

パスカルは人間の認識能力を、「感覚」(sens)、「理性」(raison)、「信仰」(foi)に三大別した。

理性の特徴は厳密な演繹推理と帰納推理にある。推理能力としての理性の面目躍如たる学問的典型は幾何学であろう。その一面に着目したパスカルは、理性を「幾何学の精神」(esprit de géométrie)と言い換えている。

他方、パスカルは全体の状況を「瞬時に」(tout d'un coup)、「一目で」(d'un seul regard) (L512-B1)理解する理性の働きにも着眼した。理性のその機能は、生きて活動する人間の日常的営為を研究する上で不可欠である。程度の差こそあれ、誰もが日常使用しているその理性を、パスカルは「繊細

の精神」(esprit de finesse)と命名して、「幾何学の精神」と一線を画した。

「理性」の全体像を構成する「幾何学の精神」と「繊細の精神」の特徴を明確にするのが、本稿の目的である。

— パスカルの生きた時代と三つの秩序

西欧中世の世俗の権力の象徴と云えば、神聖ローマ帝国皇帝であった。しかしながら、不世出の偉大な皇帝カール五世が最強の神聖ローマ帝国を統治する時代に、帝国は皮肉にも西欧全土を震撼させる爆弾男を抱えていた。その名はマルチン・ルター。そのヴィッテンベルク大学神学教授が宗教改革の狼煙を上げると、新旧両派や旧教内部の対立抗争がたちまち、雨後の筈のように噴出

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

した。人間の精神を刷新するルターの運動は、春の雪崩のように、西欧全域に連鎖応を呼んだ。その結果、さしもの強大な武力を誇る神聖ローマ帝国も弱体化した。長年、スペイン国王を兼務するカール五世に圧迫され続けてきたフランスは、たがの緩んだ神聖ローマ帝国皇帝の虎口をやっと脱する好機を掴んだ。アンリ四世は他国に先駆けて、国内の宗教戦争（ユグノー戦争）を收拾し、近代国家形成の基盤を固めることができたのである。

こうしていち早く国内の統一に成功したフランスブルボン王朝は、アンリ四世の跡目を継いだルイ十三世の時世（1610-43）には、リシュリユーを宰相（在職1624-42）に迎えて、絶対王政を強化したのである。善きにつけ、悪しきにつけ、歴史に残る名宰相のリシュリユーは、対外的にはドイツ30年戦争に干渉して新教徒を援助する反面、対内的には旧教徒を援護する国内政策を果敢に実施した。その結果、神聖ローマ帝国の皇室ハプスブルグ家は斜陽となり、代わって、フランスブルボン王家が国際的に発言権を大幅に増大した。

神聖ローマ帝国の後退に伴い、国際的に優位に立ったフランスブルボン王朝の最後の詰めは、国内の新体制の整備確立であった。十七世紀前半のフランスには、中央集権制の導入に伴う利害の対立から、国内に反乱や新旧勢力の衝突が頻発していた。フランス国内に発生した最大の内乱はノルマンディーの反乱であろう。その前後にも大小の反乱が各地で発生したが、封建大貴族たちの反乱たるフロンドの乱を最後に、フランスの絶対主義体制は揺るぎないものとなった。時の宰相は、のちのルイ十四世の摂政を勤めたマザラン（在職1643-61）であった。彼はリシュリユーの政策を継承する宰相であった。リシュリユー、マザランという偉大な宰相たちによる国土の地均しが終結するや、1661年より、ルイ十四世の親政時代、即ち「偉大なる世紀」が呱呱の声を上げたのである。

パスカル（1623-62）が存命した時期は、リシュリユーの時代からマザランの時代までであった。二人の比類なき強権宰相がブルボン絶対王朝の礎を強固に築き上げるまでの、血なまぐさい歴史の

転換期に、パスカルは一生を送ったのである。ブルボン絶対王朝を権力の中核で支えた両宰相は、政治的目的を達成するためには新旧両派の渦巻く憎悪をも巧妙に利用する、老獪にして剛腕の政治家であった。そうしたたかな政治権力の醜悪さを、在世中に、繰り返し巻き返し見せつけられたパスカルは、世俗に三段の秩序（trois ordres）を洞見している。

それを昇順に並べれば、「身体」（corps）の秩序、「精神」（esprit）の秩序、「愛」（charité）の秩序である。換言すれば、それはそれぞれ、政治権力者の統治する地上の王国、その上に君臨する知識人の誇る精神の王国、両王国のヒエラルヒーの頂点に燦然と輝くキリストの愛の王国に対応する。以上の世俗の三段の秩序の間には、相互に飛び越えることのできない大断層がある。つまり世俗の三段の秩序は、それぞれ自己完結した異次元世界なのである。パスカルにとって、最善の秩序とは「愛」の秩序であり、キリストの愛の交わりが成立する王国こそ、実体的真理（vérité substantielle）の王国であった。アルキメデスに代表される学問研究に象徴される「精神」の秩序といえども、パスカルには次善の秩序にすぎなかった。

パスカルは人間の認識能力を、「感覚」（sens）、「理性」（raison）、「信仰」（foi）（「権威」authorité、「心」cœur、「本能」instinctとも言い換えられる）に三大別した（1）。こうした認識能力は、それぞれ上記の三つの秩序に対応している。「感覚」に対応するのが「身体」の秩序であるのに対して、「理性」に対応するのが「精神」の秩序である。理性の特徴は厳密な推理能力（演繹と帰納）にある。推理能力としての理性の特色が顕著に発現した学問は、若きパスカルにとって、選択の余地なく幾何学に他ならなかった。パスカルは、ローティーンにして早くも幾何学に卓越した天分を発揮して、メルセンヌアカデミーに出入りする数学者の父エティエンヌを感涙に浸らせた、というエピソードの持ち主なのである。デザルグと並ぶ射影幾何学の新進気鋭のホープ、パスカルは、理性のその一面に着目して、この理性を「幾何学の精神」（esprit de géométrie）と命名した。

他方、パスカルは全体を「一目で」(d'une seule vue) (L512-B1) 把握する理性の働きにも着眼した。私たちは平生、日常生活の中でその手の理性をよどみなく使用している。この理性を、パスカルは「繊細の精神」(esprit de finesse) と命名して、「幾何学の精神」とは画然と区別した。

「感覚」や「理性」と別立てにされた第三の認識能力「信仰」は、「心」(cœur)とも「本能」(instinct)とも言われ、「愛」の秩序に対応する。「心」は、「幾何学の精神」が働く基盤となる第一原理(時間 temps・空間 espace・運動 mouvement・数 nombre)や、定義不可能な基本的用語(人間 homme・存在 être)を直感(sentir)するだけではなく、「神の恩寵」(grâce)もまた直感する。

三つの秩序の間に無限の飛躍があるように、三つの認識能力の間にも無限の深淵が広がっている。

二 幾何学の精神

パスカルの生きた十七世紀はフランスの実験科学の黎明期であった。ルネッサンス発祥の地イタリアからは、ガリレオ・ガリレイやトリチェリの最新の実験報告がアルプスを越えて、メルセンヌの主宰する学問サークル(常連は、デザルグ、パスカル父子、プティ、ミドルジュ、ロベルヴァル、等)のもとへ、次々に寄せられた。実験科学の重要性を認識すると共に、学問研究に幅広い関心を向けるパスカルは、最も確実な学問を探った。彼の結論は幾何学であった。幾何学こそ人間の諸科学の中で最も完璧な学問であるとする点で、パスカルは中世スコラ哲学の影響圏を脱出して、古代ギリシャのプラトンの学問的方法論にまで原点復帰した。幾何学を諸学の基礎に据えるパスカルの立場は、メルセンヌアカデミーに集う自然科学者たちと同一であるのはもとより、デカルトとも共通する姿勢であった。

幾何学の確実さを保証する方法とは、分析的・総合的方法であった。定義と公理に遡る道が分析的方法であるのに対して、定義と公理から出発して定理を証明する道が総合的方法である。そうした幾何学の分析的・総合的方法を駆使するのが

「幾何学の精神」である。

(一) ユークリッド幾何学の方法とその限界(第一原理)

私たちの知るユークリッド幾何学は定義と公理を始点とする。定義とは事柄の意味を確定する操作であるが、全ての事柄が定義可能なわけではない。公理とは証明無しに「心」に真と認められる内容であり、これが推理や判断の基礎となる。以上の定義と公理を用いて命題を証明し、さらには系の証明を積み重ねていく確実な学問体系が、ユークリッド幾何学である。

しかしながら、諸学が確実性の範と仰ぐ幾何学といえども、全ての事柄を定義したり、証明できるわけではない(*De l'esprit géométrique* in BR, t.IX, 1914, §1, p.254)。それは不可能である。幾何学でさえも、その根底には、「もはや定義できない基本的な用語」(「人間」・「存在」)や、「証拠として役立つのにこれ以上明白なものをもはや見いだせないほどに明白な原理」(*ibid.*, p.246) (「時間」・「空間」・「運動」・「数」)を自然によって与えられている。

幾何学の根底に伏在する基本的用語や第一原理(premières principes)を把握する機能は、「心」に存する。

心は空間に三次元あり、数は無限である、と直感する(L110-B282)。

パスカルは、私たちの推理の根底に「心」の直感が先行する事態を見通していればこそ、こう断言するのである。

原理は直感され、命題は結論される(*ibid.*)。

幾何学は直感された第一原理をベースに推理体系を構成するので、

実際、幾何学の秩序は説得力の不足という点では劣っているが、確実性の不足という点では劣っていない(*Op. cit.* in BR, t. IX, 1914, §1, p.246)。

幾何学の秩序を奥底で補完するのは神の創造した「自然」である。「自然」が「心」に捕捉させる「時間」・「空間」・「運動」・「数」には、共通の性質が認められる。それは「無限大」(l'une de grandeur)と「無限小」(l'autre de petitesse)

(*ibid.*, p.256) の存在である (2)。

「幾何学の精神」が「第一原理」の中で逢着する「二つの無限」の存在は、「自然の最大の驚異」(les plus grandes merveilles de la nature) (*ibid.*, p.256) である。幾何学の研究中に二つの無限に逢着したパスカルは、実際に、心身共に「無」(rien) と「全体」(tout) との間に吊り下げられた人間存在の中間性を謙虚に痛感している (3)。

幾何学の精神が証明抜きで受容する第一原理が、幾何学の精神にとっての限界となる。つまり、「幾何学の精神」は「第一原理」に内在する「二つの無限」に逢着して、自らの有限性を否応無く自覚させられるのである (4)。

(二) 「心」に直感される「恩寵」の真理性

幾何学の精神が、自らの働く場となる第一原理の真偽 (実在か幻影か) を質すことなく、その第一原理の上に全面的に依拠するからといって、幾何学の体系が不確実ということには決してならない。

第一原理の認識は私たちの推理が私たちに与えるいかなる認識にも劣らず堅固である (L110-B282)。

第一原理は、自然が人間の「心」に与えた万人共通の普遍的真理である。この点に着目するパスカルは、「心」に直感される「恩寵」を「第一原理」に対応する普遍妥当の真理だと、類比的判断を下す。パスカルはそれを裏付ける確認作業として、歴史上数多くの人間が何らかの事件を転機に人格的転換を遂げた事例を研究する。その結果、パスカルは、人間の内面に往々にして発生する回心(神へ向き直る心の転換)の理由を、理性の次元を超越した「愛」の秩序に内属する「恩寵」に求めたのである。求める者の「心」に突如として直感される「恩寵」は、第一原理と同様に普遍妥当の真理であり、人間の霊的救済につながる、とパスカルは洞見した。霊的救済としての恩寵の確かさを確信するパスカルは、次のように断言している。

神から心の直感を通して宗教を与えられた人たちは、全く幸福であり、全く正当に納得させられた者である。けれども宗教を持たな

い人たちには、神が彼らに心の直感を通して宗教を与え給うまで、かりに推理によってそれを与えてやる他はない。この心の直感がなければ、信仰は人間的なものにすぎず、靈魂の救いのためには無益である。(L110-B282)

三 繊細の精神

パスカルは研ぎ澄まされた「幾何学の精神」に恵まれていた。天与の才能を遺憾なく発揮するパスカルは、十代にして欧州の学会 (精神の王国) に巨名を馳せ、アルキメデスの再来、とまで謳われた。しかしながら、彼は生来病弱な上に、学問研究への極度の没頭が身体にさわり、十代にして既に、病床の人であった。彼の生涯の伴侶は得体の知れない病気であった。

一日、医者が若きパスカルに気分転換を勧めたのを機縁に、彼は未知の社交界に出入りするようになった。そこで幾何学者パスカルは、洗練された物腰のオネットム (honnête homme) や貴婦人の社交術の妙に触れ、眼の鱗が落ちる想いを抱いた。彼はオネットムから「繊細の精神」(esprit de finesse) (5) を深く印象付けられたのである。その証拠に、『パンセ』中には、メレ (Méré) やミトン (Miton) といった当代を代表するオネットムが登場している。

オネットムとは洗練された知的社交人を意味する。それは当時の上流階級の間で憧憬的であった。ジェントルマンの語源ともなったオネットムは、まず何よりも、豊かな教養を身に備えた文化人でなくてはならない。時と場所と目的にふさわしい話題をさりげなく提供し、いかなる話題にも機敏に対応できる教養人でなくてはならない。それでいて謙虚で出しゃばらず、そうかと言って引込み思案ではさらさらなく、人当たりが実によく、誰の心証を害することも無い見識家、周囲が気がつけば、いつしか満座を和気藹藹に盛り上げる引き立て役になっている、そのような陰君子が、オネットムであった。

物心両面に亘る人間の生産的営為の全てに対して、節度ある関心を示し、的確な判断を下せる普遍的教養人、それでいて同時に、限定された分野

では深い造詣を有するエキスパート、それがパスカルの社交時代の理想像であった (L195-B37)。つまり、「繊細の精神」と「幾何学の精神」をそれぞれ融通無碍に駆使できる人に、若きパスカルは憧れたのである。社交時代のパスカルの理想の人間像は、いわば、レオナルド・ダ・ヴィンチに代表される、ルネッサンス時代の万能人であった。後年、社交生活に幻滅と悲哀を抱くようになったパスカルも、当座は、見るもの聞くもの全てに心を奪われた。

では、オネットムから滲出する「繊細の精神」とは何か。「幾何学の精神」が定義と公理とから定理や系を証明する精神であるのに対して、「繊細の精神」とは、流動して止まない生の動き全体を「瞬時に」「一目で」把握し、T. P. O. を念頭において的確に状況判断する精神を意味する。ここで理性を構成する二種の精神を対比させているが、「繊細の精神」といえども推理と無縁の能力ではない。

この精神は暗黙の内に、自然に、巧まらずに推理する (L512-B1)。

ところが、世間には、「幾何学の精神」と「繊細の精神」を申し分無く兼備する人物は稀有である (*ibid.*)。けれども、それがパスカルの一時期の憧れの姿であった。

従来、抽象的学問に従事してきたパスカルが心機一転、心弾ませながら打ち込んだ人間研究の成果は、「神無き人間の悲惨」(Misère de l'homme sans Dieu) (L6-B60) であった。パスカルはその真理を『パンセ』の中で披瀝するに当たり、人間の心身の営みがあるがままに描き出した。彼は人間性の矛盾を容赦無く剔抉した。その人間性の孕む矛盾に対する人間学的考察が、ラフュマ版『パンセ』第一部(既分類断章)前半部(「神無き人間の悲惨」)である。そこで没価値的に人間の日常的営みを観察している点で、パスカルは、実存主義の哲学者と同一の地平に立脚している。しかもパスカルの世俗に向ける観察眼は牙え渡っている。世俗に首まで沈淪する私たち人間存在の姿を赤裸々に分析するパスカルの筆鋒は鋭く、『パンセ』には、我が身を顧みて首肯させられる人間

性の矛盾が、仮借無く描破されている。「偉大にして悲惨な」人間のこの実存状況に、パスカルは戦慄している。パスカルにとって、人間の实存状況は思考を深化させる原動力であった。そして人間研究に専念したパスカルは、天性の明晰な「幾何学の精神」はもとより、後天的に磨き上げた「繊細の精神」も又、存分に駆使して、最終的に、気晴らし (*divertissement*) に耽らざるをえない世俗の人間現象の根源的理由 (*raison*) を探り当てたのである (6)。

引用略号

L: Blaise PASCAL, *Pensées sur la religion et sur quelques autres sujets*. Introduction de Louis LAFUMA, 3vol., Paris, Édition du Luxembourg, 1952.

B: *Pensées*, 3vol.= Tomes XII—XIV des *Œuvres de Blaise PASCAL*, par Léon BRUNSCHVIG, Paris, Hachette, Collection <Les Grands Écrivains de la France>, 1904.

BR: *Œuvres de Blaise PASCAL*, par Léon BRUNSCHVIG, Paris, Hachette, Collection <Les Grands Écrivains de la France>, 1904 sq.

『パンセ』からの引用は、上掲ラフュマ編『パンセ』(通称ラフュマ第2型、略号L)に依拠する。略号の次のアラビア数字は『パンセ』の断章番号を示す。『パンセ』以外のパスカルの著作からの引用は、上掲ブランシュヴィック編パスカル全集(フランス大作家双書版)(略号BR)に依る。

註

(1)『真空論序言』では、「感覚」や「理性」から「権威」が区別されている。

「感覚や推理のもとにある事柄に関しては、事態は同じではない。そこでは権威は無用である。理性だけがそれを知る理由がある。理性と権威はそれぞれ異相の権利を所有する」(BR, t.II, 1908, pp.131-2)。

それを追認するのが『パンセ』の次の断章である。

「私たちが真理を知るのには理性に依ってだけではない。心に依っても真理を知るのである」(L110-B282)。

「心は理性の全く与り知らぬ自らの理由を持っている」(L423-B277)。

『プロヴァンシアル第十八書簡』になると、聖アウグスティヌスと聖トマスを引き合いに出して、人間の認識能力は、次のように言い換えられる。

「私たちの認識の三つの原理(感覚, 理性, 信仰)は、それぞれ独自の対象領域を有し、その領域内での確実性を持つ」(BR, t.VII, 1914, p.49)。

ちなみに、パスカルは『パンセ』の中で、上記「権威」(=「心」=「信仰」)を「本能」とも呼び換えている。

「本能と理性、二つの本性の印」(L112-B344)

「二つのものが人間に彼の全本性を教えてくれる。本能と経験。」(L128-B396)。

また、所引の「本能」の意味内容に関しては、ブランシュヴィックやJ. シュヴァリエが、次のように、的確に把握している。

「本能とは善への渴仰、即ち私たちの原初的完全性の思い出である。経験とは私たちの悲惨と失墜の自覚である」(L128-B396の編註)。

「この本能とは善への憧れであって、神が私たちの内に置き給うたもの、私たちの最初の偉大さの名残ともいうべきものである」(J. CHEVALIER, PASCAL, 1922, § IX.)。

(2) いかなる運動、いかなる数、いかなる空間、いかなる時間にせよ、常にそれよりも大きいもの、それよりも小さいものが存在する (Op. cit. in BR, t. IX, 1914, §1, p.257)。

(3) それというのも、そもそも人間 (l'homme) は、自然のうちにおいて何者なのであろうか。無限 (infini) に対比すれば虚無 (néant), 虚無に対比すれば全体, 無 (rien) と全体 (tout) との中間者。両極を理解することからは無限に隔てられているので、事物の果てと始まり (la fin des choses et leurs principes) は、彼には底知れぬ神秘のうちに詮方なく隠されて

いる。彼は自分がそこから引き出されてきた虚無も、そこへ呑み込まれてゆく無限も、いずれも見ることができない。(L199-B72)

(4) 拙論「パスカルの神の存在証明—『パンセ』既分類断章の分析より—」(『鹿屋体育大学学術研究紀要』第12号, 1994, pp.71-77), 参照。

(5) 『幾何学の精神について』の中では、「繊細の精神」は、「説得術」(art de persuader), 即ち、「説き伏せる術」(art de convaincre) であると共に「気に入る術」(art d'agrèer), と言い換えられている (BR, t. IX, 1914, § 2, p.275)。

(6) パスカルの悲劇的逆説的人間観について初めて慧眼を示したのは、思想家のゴルドマンであった。パスカルの人間観については、次の拙著を参照。

『パスカルの人間観—天使でもなければ、野獣でもない—』行路社, 1992年, 第三部。